

東北大学病院での実習を終えて



(<https://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/campus/01/access/>より)

A グループ

①授業前の知識

(A) デザイン思考については、医療概論の中川先生の講義、実践スタンフォード式デザイン思考（ジャスパー・ウ、三崎大悟著）、イシューからはじめよ（安宅和人著）から、事前に学習した。一方で、実際に実習として取り組むのは初めてであった。

(B) デザイン思考について、中川先生の講義や、既に研修に行かれた先輩から少し内容は伺っていたが、実際どのように行なうものなのかは想像できずにいた。また、医療系の知識や整形外科に関する知識はほとんど持ち得ていなかった。

(C) デザイン思考については実際にどう行うかはよくわからなかった。臨床観察は初めてであり、特に整形外科は何をする科なのかもよくわかっていなかった。

②授業の目的

バイオデザインについて学び、実践する

③到達目的

現場観察を通して適切な課題が見つけれられるようになる

④授業内容

本実習では整形外科の外来や病棟の観察と、グループディスカッションを中心に、医療者へのインタビュー、バイオ企業の方とのビジネスメンタリングなども行うことで、解決することによる効果がより大きい課題を見つけるという試みを行った。

まず1日目に東北大学病院の整形外科について概要を説明いただき、病棟を見学させていただいたうえで、見つけた課題をできるだけ書き出した。2日目も見学を通して課題を見つけ書き出した後、いくつか注目したい課題を選んで整理した。3日目は選んだ課題に注目して見学するとともに、師長や医師へのインタビューを行った。4日目は改めて課題を絞り、ビジネスメンタリングを通して最終的に発表する課題を決定した。そして5日目に2つの課題について最終発表を行った。

⑤研究や仕事などに活かせる点

(A) 今後の研究を行う上で課題の設定の重要性を学習した。まず対象をどこに設定するのか、広げるべきなのか狭めるべきなのか、その問題は何のために解決するのか、どのような方法を用いるのかというニーズステートメントは、医学研究や臨床だけでなく生活のあらゆる場で必要な視点だと思われた。論文を書く際にも、読者に明確に情報を伝えるという点で、必要な手法であると感じた。また、方法論として問題点を可能な限り書き出し、その中でどの問題を解決することが最も意味のある仕事なのかを判断するという過程は大切だと思った。研究者は新たな知見を得ることが重要であると考えているが、

その知見がどのような結果をもたらすのか、どれだけ他に影響を及ぼしうる仕事になるのかを考えて研究していくことは、これからの時代の研究者において必要なことだと感じた。

(B) デザイン思考の考え方を、研究テーマを決める上で生かせると感じた。文系の研究は、一から自分で研究テーマを定め、そのテーマを扱う理由の筋が通れば、実際の研究に移ることができる。その際、テーマとして扱う問題(課題)が、本当に解決すべきものなのかが、研究テーマ決定の大きなポイントであり、無限にある社会の問題の中で、何を問題と捉え、解決していくべきかを定めるのが、非常に難しいと思っていた。しかし、今回、デザイン思考における解決すべき課題の設定の仕方を学び、自分の研究テーマ設定に生かせると感じた。

(C) 研究についても仕事についても、そもそもどこに注目して行動し始めるかで大きく結果が変わってくるため、課題を見つける力やどの課題についてフォーカスするか見分ける力はとても大切だと感じた。特に今まで課題を考える際、それを解決してどれだけの効果が得られるかという視点から検討したことがなかったため、この経験は糧となると感じた。また、自分は人間の病気について興味を持って基礎研究を行っているため、実際に臨床の現場を見学し、患者さんの様子を見学できたことは、研究のモチベーションにつながった。

⑥影響を受けたこと

(A) 外来診療の中で患者の訴えを聞いた時に、どのような点が困っているのか、どの課題をクリアすれば解決し満足頂けるのかを考えるようになった。個々の患者から問題を抽出し、同じ課題にぶつかっている患者に適用することで、自分の患者だけでなく、多くの患者を救えるようになるのではないかと感じた。論文を書く際にも、その論文の新規知見を書き出し、特にどの課題を解決できるから研究、報告するのかという視点を持つことができた。

(B) 外来や回診など、普段は入り得ない医療現場をみさせていただいた際、医療者の方が、患者さんが抱える些細な疑問にも、丁寧に答え、不安を取り除こうとする様子が何度もみられた。その対人援助に関わる姿勢を、自らの臨床にも生かしていきたいと思った。

(C) 今回の実習を通し、まず課題を真剣に考えることの大変さと重要さを感じ、何か壁に当たった時はこの思考方法を思い出そうと思った。またグループワークを通して自分の思考の特徴を指摘され、自己理解が深まった。さらに個人的には、ビジネスメンタリングをしてくださった方のお話が自分の進路と重なる部分があり、進路選択においても影響を受けた。

⑦来年度以降の改善点

回診や外来で医療者の方に話を聞くことが難しいため、医療者インタビューをまとまって取れる時間をもう少し確保して欲しかった。特に看護師にインタビューするのが難しかったため、初めからインタビューできる機会が設定してあると良かった。

⑧授業の限界

(A) 以下の点が授業のよい点であるとともに限界であると感じた。①実習期間が5日間と短く、情報収集に限界があった。一方で時間が区切られているため、常に緊張感を持って課題を探索することができたと思う。②グループの人数が3人と小人数であり、共有できる情報に限界があった。今回、教育学部、理学部の学生とグループであり、問題抽出、論理の組み立てを各自の領域的視点から行うことができた。有意義であった分、さらに他分野（工学部や薬学部など）の意見、考え方を知りたかった。

(B) 5日間という短い期間であったため、自分たちが立てた困りごとに関する仮説を医療者の方に検証していただく時間が十分に取れなかった。もう少し、実習の中盤から後半にかけて、医療者の方に十分に話を聞ける機会があれば、仮説検証を十分に行えたかもしれない。

(C) 一番強く思ったのは、この授業では現場の声を引き出すという体験をしっかりと行うのが難しいという点だ。これは5日間という時間の制限や、医療現場という特性上仕方がないかもしれないが、なかなか1人1人にじっくり話を聞き、潜在的な課題を見つけるといえるのはできなかつた。課題を見つける際には適切なインタビューを行うことが重要だと思うが、その練習ができたかは少し疑問だった。

⑨まとめ

この実習を通し、デザイン思考を使って適切な課題を設定する体験ができた。今回学んだデザイン思考の概念や課題設定の方法はそれぞれの研究や仕事に生かせる部分が多く、今後もこの知識を活用できると感じた。また、医療現場に入ることは他分野出身の学生にとってなかなかできないことであり、個人の研究にとって良い刺激となった。